

ダンジョンに希望を求めるのは間違っているか？

柳川 椿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

TS転生した一人の少女（男）の物語、これは自分の好きなように一生懸命頑張る物語である。

初投稿です、作者のメンタルはアルミホイル製なので酷評はそこそこにしてもらえると助かります。ヤマト要素はほとんど出てこないと思います。

好きじやなかつたらブラウザバック推奨

拙いですが楽しんでいただければ幸いです。

R—15・アンチ・ヘイトのタグは保険

目

次

一頁目  
二頁目  
三頁目  
四頁目  
五頁目  
六頁目  
七頁目

40 33 27 19 10 5 1

# 一頁目

§月 日

どうやら周りで日記を書くのが流行つて いる そ うな ので 友人 に  
押 快く譲つてくれたし付けられた日記を書いていこうと思う。

今日でこの世界に転生してきておおよそ25年近く……気づけば（種族換算じやまだ若い方だけど）アラサー、そろそろ周りも「結婚しないのー？」とか「最近良いヒトがー」とか「フランたー」とかよく聞くお年頃になつて來た……いや、男から女に転生したいわゆるTS転生した人間にそんな事言われても……

そういうや今日副業先で同僚が原作ベル・クラネル主人公にお弁当渡してましたね。……そろそろ無印の原作の開始かー、これまで若干の原作改変があつたとは言え喜ばしいな、

無事に事を成し遂げてくれ、オレの給料と平穏と飯の為に!!!!  
そういうやあの子の料理つてとある神の高位眷属が悶絶するレベル  
じやなかつたけ……

巻き込まれないようにしなきや（決死の覚悟）

§月 日

疲れたー……いや、毎度のことながら受付嬢と酒屋の給仕の二足の草鞋は大変だわー……ま、このオレの美貌なら是非も無いよね！

……

何、日記に書いてるんだろう……いや今日はもう寝よう。

うんそうしようそうした方が良いてかそうする、オヤスマニ！

そういえば今夜、主人公君無事に食い逃げしてたなあ……

原因のあの犬とまな板は今度ぼつたくつてやろう……

無事にギルド内でも話題になつてたし原作通りに進んでて何よりです。

ミアママへの説得にはオレも参加したとは言え道のりは特に変わつてなかつたな、せいぜいシルに若干ジト目で見られたくらいか・・・大丈夫だよな・・・？

§月三日

オレのシフトは朝9：00～17：00までギルドで働きそこから18：00～22：30まで居酒屋で働いているため給料はそこそこ良い、なので今日はミアママに頼んでお昼ご飯のお弁当を頼んだZE！いやー美味かつた、流石ミアママ！

後から聞いた話なんだがどうやらちゃんとベル君はお金を返しに来たらしい、良かつたなミアママの必殺技が唸るところだつたぞ。

そして今夜は神の宴があるらしい、良いなー美味しいご飯食べたい神々に飯テロされたので明日もミアママにお昼頼もうつと

ミア side

「ねえねえミアママミアママ」

「なんだい、給料の前借は無しだよって最初に説明したのを忘れたのかい？」

仕事の終わつたアタシに話しかけてきたのはハルメシア・エキドナウ、と名乗つてゐる黒髪の女いわゆる偽名つてやつを名乗つてゐるが事情が事情なので仕方無いだろう。バレた瞬間にこいつにかけられる迷惑を考えればな

「そんなんじゃないつて、一応オレはこれでもギルドの受付嬢だよ？」

「はん、そんな受付嬢サマがアタシに何の用さね」「あつれえ・・・？ミアママなんか機嫌悪い・・・？」

当然だろう、と返すと思いつきり首をかしげてやがるコイツにはあきれたもんだ、なんで見ず知らずの冒険者の食い逃げを許すかね、コイツは特にその辺厳しかつたはずなのに、理由を聞いても「シルが気

にかけてるから」の一点張り、誰が納得するのかそんなの  
思いつきり「はあー」とため息を吐いて

「それで前借りじゃないとなると一体何の用だい？」

「あ、そうそう、実はさオレ受付嬢とこの給仕の兼業してたじやない」

「それがどうしたんだい」

まさか辞めるとでもいうのか・・・？と思つて半目で見ると焦つた  
ように  
「えつと、ミアママの弁当を頼みたいなーって  
ん？」

「弁当お？」

「そろそろ弁当、兼業してるから給料も良いからミアママの弁当を頼  
んでも別に大したことないなーって思つてね」

なんだいそんなことか

「それならシアのために腕によりをかけで作らせてもらうよ」

「マジで！？やつたー！」

わーいと叫んでもると、他の子もよつて来て話始めたのを見て考  
える。

この店がどの組織からも完全に中立でいられるのはアタシとシア  
のお陰かもなつて

「はいはい！じやあ私もミア母ちゃんのお弁当食べたいにや！」

「おや、アーニャアンタこのアタシの弁当を頼めるほど金を持つてた  
のかい、こりや給料を少し下げてもいいかもねえ」

「にやにや?!にやんで!?そ、それにやらシアの方こそ給料をさげにや  
いとダメなんじゃ!?」

「アンタ今までこの店にいくら迷惑をかけたと思つてるんだい」

「そ、それはあ・・・」

「さあてアーニャの給料はいくらになるかなあ・・・」

「ごめんにやさい！給料だけは！にやんでもするから給料だけはー

!!!

厨房に下がりながら可愛い娘たちの笑い声が聞こえる、戦いだなん

てモンに関わらなくともここに生きてられる笑っていられる、アタシとあの子で娘たちの笑顔を守つていけばいいなと心から思った

なお、翌日に「神々の宴で美味しいもの食べてると聞いていたらなんかムカついたから今日もお願ひ」って言われた時にはきつとアタシの顔はものすごくあきれた顔をしてただろう

二二  
頁目

§月日

オレは声を大にして叫びたい、疲れたと  
かれたああああああああああああああああ  
・・・・・・・・・・・・

怪物祭開催当日の今日、ギルド職員であるオレは毎年恒例と言つ  
モンスター・ファイア

ても差し支えないがネーデル・ファミリア主催の怪物祭の誘導係兼迷子案内兼迷惑客対策兼非常時への対策係をやつていたのだが…多くねえか!? オレだけ明らかに仕事量多くねえか!? ああ…しかも今日がヘファイストス謹製の神様のナイフ（ヘスペティア）がベル君に贈られる日だし…ここは割と重要だから逃したくないが…それ以上に！

屋台のご飯が食べたい！！

のに！仕事か！多い！

ああー！今日限定発売のじやが丸君……焼串……お酒……  
特にお酒！滅多に外に出回らない極東直送の清酒が飲めるつて聞いてたのに！それが潰れるとかマジでないわー、ないわー、しかもこれってあの美女神が引き起こしたんでよ？はた迷惑極まりないわ、おかげさまで久々に戦装束着て戦闘する羽目になつたし……どーしてくれるんだこんちくしょー!!!!

口キ s i d e

どもども、天界一の美少女神のロキとはウチの事で、つて誰に自己紹介してんねん！

一  
口  
辛  
大  
丈  
夫  
？

隣でウチの事を心配してくれる優しいいゝ天使はウチの眷属のア  
子供

「はっ!? あ、いやなんでもないで、ウチの事を心配してくれるなんて  
アイズたんは優しいなあ／＼きつとママの教育がええんやろなあ」  
いやホンマに、ウチの事を心配してくれるやつは少ないんや「いつ

もの発作だから気にしなくていいよ」とか「また変態的なことを考えているのだろう、私や他のエルフやアイズなど女性メンバーに被害が出るようならレア・ラーヴァティンを撃つてでも焼却する」とか「ただ馬鹿な事しか考えておらんから儂等男衆が気にしたところで時間の無駄じやよ」とか（主に幹部メンバーに）ウチを心配してくれる奴だなんてひとつよりもおらんからなあ……いやこれもある意味一種の信頼の証だと思えばなかなか……

「？よくわかんないけどとりあえずどこに行くの？」

「ん？ああ、それはなあそこの建物や、あそこでちよつと腐れおP・ゲフングフンフレイヤに会いに行こうとちよつと前に話をつけてな」

「そう」

「……いや、なんか他にないんか？」

「??あ、すぐに終わるならダンジョンに行きたい」

「いやダメに決まつとるやうがい！」ビシツ！

全くもう、目え離すと直ぐこれや

正直遠征から帰ってきたばっかやしもうちよいゆつくりしても罰は当たらへんとおもうねんけどなあ……

ロキ&アイズ移動中…

さつてつと、あの腐れ美女神はあつと……お！おつた

「よおーフレイヤ、待たせたか？」

「いえ、少し前に來たばかり」

つち、紅茶なんか飲んでやがつてサマになつとんのがムカつくわ  
「宴の後随分と寝込んでたそうじやない、一人で自棄酒して酔い潰れて……ふふ」

ガタタツ！

「おい腐れ（ピ——自主規制）！どつからそんな情報を……」

「貴方の可愛い団員達が話の種に盛り上がつてたそうよ」

「コイツ……マジで、いつか泣かしたるツ……！」

「ところで、いつになつたら彼女を紹介してくれるのかしら？」

「ん？ そういうや初対面やつたか、【ロキ<sup>う</sup>・ファミリア】のアイズや、これで十分やろ？」

「…………始めてまして」ザツ

(剣姫…………可愛いわね)

「ぬふふ…………せつかくの怪物祭、しつかりきつちりアイズたんとラブラブデートを堪能するんじやあ!!」

せや！ こないな美少女とデートできるやなんてなかなかないからな、そして何よりも……！

「放つておくとまーたすぐダンジョンに潜ろうとするからなあこのお姫様はもー！『遠征』も終わつたばつかやつてのに…………誰かが気を抜いてやらんと一生休みもせん」ばしつばしつマジで、な…………どうしたら治るんかなあ…………

力チャン……

「――それじやあ、こんなところに呼び出した理由、そろそろ教えてくれない？」

「んう、ちょい久々に駄弁ろうとおもつてなあ」ははつ  
「嘘、ばっかり」

「……注文…………」「大丈夫」

「…………素直に聞く、何やらかす氣や」

「何を言つてるのかしら、口キ」

「とぼけんな、あほう。急に『宴』に顔出すわさつきの口ぶりからして情報収集には余念がないわ…………今度はなに企<sup>たくら</sup>んどる」

「企むだなんて人聞きの悪い」

「じゃかあしい」

なんやコイツ、いつもより突つかかつてくるな。

つー事は…………

「はああああ…………男か」ギイツ

やろなあ、コイツ微笑んでしかないけど

「つまり、どこぞの【ファミリア】の子供を気に入つたつちゅうわけか、ハア……相変わらずの男癖の悪さやな」

「ふふふ」

あ？

「何がおかしい？ フレイヤ」

「バ」めんなさい、悪気はないのよ。ただ・・・」

「ただ？」

「今日は女の子も欲しいのよね」

は？フレイヤが？女を？マジか

「ヤマジ」

コイツが

「この色ボケ女神が、年がら年中盛りおつて、誰だろうとお構いなし  
か」

「支那の外見」

「彼の二繫帯つて、お色や更別ぎ元の一いつ二

ま、便利なのは否定せんわ、それよりもお・・・

? -

〔二〕

「とほけんな、どんなヤツらや田に留まつたのは」ニマア  
今はこれが超気になるツ・・・・!

一九二三

おーおー物憂には窓の外見てまあ・・・

一女の子の方は……そうね、とても強いわ今まで見たことが無いくらい。とても蒼くて綺麗な娘、だけど、流れるがままに生きている。強

いにと流れやすくて ても流れに逆らふとも出来る不思議

「…………強くは、ないわ。今はまだ、頼りなくて傷つきや

簡単に泣いてしまう……そんな子。でも、綺麗だつた、透き通つ

ていた。あの子は私が今まで見たことない色をしていたわ」

「・・・」

「二人とも、見つけたのは本当に偶然、あの時もこんな風に・・・  
ん?どうしたんや固まつて

「あん?どうかし「ごめんなさい、急用ができたわ。また会いましょ  
う」スツ

「はあつ!?

え?は?なん?!

「ええー・・・・・・、急になんやアイツ・・・・・・・・  
ほんまどうした・・・・・

「なあアイズ・・・・・・アイズ?なんかあつたん?」

アイズたんはこんなになつとるし、フレイヤはどうか行つたし・:  
どーなつとんねん・・・・・

それにも・・・フレイヤが欲しがつてる女、もしかしてあいつ  
か?生きつとつたんなら辻褄が合うが一体どこにおるんや、大分特徴  
的やから見逃すハズないとと思うねんけど・・・・

## 三頁目

第三者 Side

モンスター・ファミリア

怪物 祭のさなかに起きた『ガネーシャ・ファミリアが収監しておいたモンスターの脱走』それは祭りの雰囲気を楽しんでいた者たちにとって晴天の霹靂であつた。そんな中冒険者たちは商人や弱い者を守ろうとしたが出て来たのはヘルハウンドの群れである

ヘルハウンドとは13、14階層に出現するとされる仔牛程の大きさをした黒い犬の姿のモンスター。「放火魔（バスカビル）」の異名を持つの一般的には強いモンスター。出現する階層の13～14は大体レベル2～3の者たちが行く中層のモンスターである、だが冒険者の多くはレベル1～2がほとんどでありまた、精神的にも口キ・ファミリアなど一部のファミリアを除き未熟なものが多い、何故なら上に立つ者が居ないから。居ないなら自分が取つて変つてやると言つた気概のあるものは軒並み上方のファミリアに入つてしまふため下の者が育たないのである。

・・・この現状をとあるファミリアの冒険者が見ればあらん限りの罵詈雑言を投げ捨て、しまいには殴りかかつて来るものも居るだろう。もつとも、殴ろうとするのは一部のみ……であると願いたい……さて、現状に戻つて

「おいおいおい!! 聞いてねえぞ！こんな数!!」

そう叫ぶのはリーダーらしきヒューマンで片手剣と小型の円盾使

い

「マジでどうなつてんだこんな街中でこんな数のモンスターが暴れてるなんて!?」

「知らないわよ！ ガネーシャ・ファミリアが何かやらかしたんじゃないの!?」

そういう犬 シアンスロープ 人の槍使いに猫 キャットピープル 人の双短剣使い

「逃げんのか!? おい!?」

「ばつか、オメえこんな街中で逃げてみろ！ 一生笑われるぞ！」

「ちくつしょーつがあ！」

「ああつもうー・どんだけ居るのヘルハウンド!!」

それもそのはず、ガネーシャ・ファミリアは何を思つたのか10匹以上連れて来たのだ、率直に言つて馬鹿なんじやねーの？

「つてやべえ！」

立ち回りが上手かつたのか、一対タイマンで対応していたが踏み込み過ぎて一気に3匹と相対してしまつた犬人槍使い

「何やつてんだ馬鹿！突つ込み過ぎだ!!」

「私が援護するからあんたはこつちお願ねがい！」

「つてかどう考えても人手が足りねえ！他の冒険者はどこ行つた！」

「それならさつき一人死んで一人は蹲つて残りは逃げつてたよ！」

「マジで死ぬなあ！おい！どいつもこいつも根性なしかよ！」

頑張つていたが、それでも彼ら彼女らはレベル2と1どう頑張つても牽制・遅滞が精一杯で勝機は低かつた

互いにかばい合つたがそれでも疲労が進んでもう駄目かと覚悟を決めたその時、ふわりと間に入り込み手に持つた細剣レイビアで襲い掛かつた来たヘルハウンド全てを穴だらけもしくは切り刻んでから振り返つて

「・・・大丈夫？」

と聞いて来た、こちらに声をかけるまで僅か数舜でモンスターの討伐を行う技量・レベルの高さ、女神と見間違うほどの美貌を備えた人物はこのオラリオにおいて数えるほどしかいない

【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン

レベルは5、所属ファミリはロキ・ファミリア、ダンジョンの深層にすら行つて帰つてこれる正真正銘の強者。

「あ、ああ助かつた。かすり傷や疲労こそしてゐがまだ立てる、礼を言うぜ剣姫さん」

「そう・・・」

「・・・じゃ、俺らは避難誘導をしてるから、ここは任せても？」

「大丈夫、モンスターは全て殺す」

「そりや頼もしいことで、行くぞお前ら！」

「おう！」

「ケガしないでくださいね！」

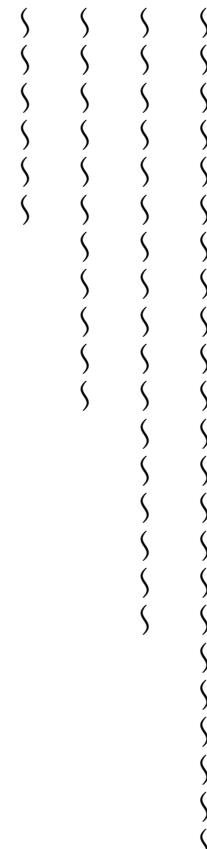
そう言つて立ち去り避難誘導を始める冒險者たち

「……やつぱりいつもの武器じゃないから扱いにくい、すぐ折れちゃうそう……」

そう何を隠そうこの時は少し前の遠征の時に体液が溶解液の芋虫によつて切れ味が落ちたデスペレートの代わりとしてゴブニュ・ファミリアから渡されたそこそこ良いお値段のする武器である、だいたい4000万ヴァリスほど（大体50ヴァリスもあれば普通の人はお腹いっぱいになるご飯が買える、そしてデスペレートのような不壊属性のような属性付きだつたり良い武器は簡単に億を超える）

その時

（ツ!?おつきな音、まだ何か居る?）



「はああああああああああ!!」

ドゴンッと轟音を鳴り響かせながら緑色の目のない蛇のようなモンスターを殴つたり蹴つたりしている一人の女戦士姉妹。顔立ちと体格が同じなのだが体の一部が違う（妹のティオナの方は薄く、姉のティオネは厚い。ナニとは言わないうが）

「かつたああああ……手がじんじんするんだけど……」

「つつづ……!!確かに、素手とは言え私達<sup>アマゾネス</sup>の攻撃を防げるなんて……こいつら深層クラスね、レフイーヤ!!前は私達が受け持つから思つくりぶつぱなしなさい!!」

「は、はい!!」

レフイーヤと呼ばれたエルフは早速詠唱を始める

「解き放つ一條の光。聖木<sup>セイボク</sup>の弓幹<sup>ゆがら</sup>。汝、弓の名手なり!」

（急がないと、早く速く！短文詠唱なんだからもつと!!）

【狙撃せよ妖精の射手。穿て、必中の矢】！」

レフイーヤの前には別の方向を見ている緑の蛇型モンスター、それを見たレフイーヤはイケる、と心の中で叫び魔法を放とうとしたその時

(・・・・・え?)

唐突にこちらに頭(?)のようなモノを向けたと思ったたらレフイーヤの右の脇腹を地面から生えた触手のようなモノで横から刺された、そして刺したまま振り回しある家に叩きつけられた

「レフイーヤ??!!」

「待つてて！今助けるから!!」

二人がそう叫んだあと緑の蛇型モンスターは頭のようなつぼみを開き花を咲かせた

「花!？」

「コイツ蛇じやなかつたの!?ってまずい、ティオネ！レフイーヤが！」花のモンスターは中心にある口のような部位を開けレフイーヤを喰らおうとその鋭い牙をのぞかせる

(うご、かなきや・・・ここで、は死ねない・・・死にたく、ない)

が、動こうとすると先程刺された脇腹が痛む

「ああ、あ、ああ、あああああ、あ、あ!?」

(痛い痛い痛い！動かなきや逃げないと死にたくない死にたくない死にたくない!!)

傷に障らないようにゆっくりとしか動けず遅々として逃げることができない

「レフイーヤ！こんつの！邪魔ア!!」

「クッソ、レフイーヤ逃げて!!」

と、その時。花のモンスターの首を刎ねた人物がいた

今にも喰われそうになつて いるレフイーヤを助けたのはアイズ・ヴァレンシュタインではなく

「よつと、ありやりや酷いな大丈夫？エルフのお嬢さん？」

斬つと音を響かせ花の首を刀で刎ね飛ばしたその人は腰まである長い黒髪と金髪インナーカラーという特徴的な髪を背中の肩甲骨あたりでリボンのようなもので縛り、鍔のない柄から鞘先まで真っ黒な

刀を持ち裾と袖に極彩色の花々が描かれた巫女服と千早を羽織った綺麗な人だつた、世間一般では美少女と評されるレフイーヤが一瞬思考が止まるほどの綺麗な女人の人だつた

「え、あ、えつと、その、はい脇腹が……」

「んそうかそうか、じゃとつととあの花を殺してくるから待つてね」

「・・え・・・・あ・・・・」

その人は追加で出て来た大量の花のモンスターを次々討伐していく。時に刀で時に

「」

何かを呑いた後に出される青白い魔力砲、獨特な音を出しながら放たれるそれは他の魔法使いから見たら嘘かと思えるほどの魔力を内包しておりへタな魔法師一人分の魔力砲を連発しているのだ。しかも、威力がすごくモンスターを貫くのでは飽き足らず抉り取っていた

「すごい・・・・・」と思わず漏れてしまつた。だけど

良いのか？このままで

誰かにずっと助けてもらうのか？

私は、いつまで弱いままだ？

(違うッ！私は、<sup>憧</sup>れ<sup>た</sup>人の隣に立ちたい！だつたら、ここで立ち上がらないと、また守つてもらうだけの存在になつてしまうッ！)

そう思つた一人のエルフはケガの痛みに耐え立ち上がつた、誰の手も借りず、一人で両の足を使い立つた。

「ティオネさん！ティオナさん！魔法を使います！」

「大丈夫なの!? レフイーヤ！」

「大丈夫です、あの人も頑張つてるんですから、私も頑張らないと…！」

「」

「そう、なら今度こそ前は任せなさい触手一本も通さないから」

「ティオネさん・・・・」

「いよいよ燃えて来た！任せたよレフイーヤ！」

「ティオナさん・・・・はい！任せて下さい！」

「ふうー・・・・（落ち着け、私。の人にもティオネさんにもティオナさんにももう迷惑はかけれない、だから今度こそ…）」

心優しき気高きエルフは一人詠う

うたう

「【ウイーシエの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同朋よ。我が声に応じ、草原へと来たれ】」

魔力で描かれた文字が舞う

「【繋ぐ絆、楽園の契り。円環を廻し、舞い戻れ】」

文字は円を描き陣と成す

「至れ、妖精の輪。どうか――力を貸し与えてほしい】」

### 【エルフ・リング】

「ちょ!? 急に暴れ始めたよ!?」

「つ!? こいつら魔力に反応してるのはか!」

花のモンスターがレフイヤに襲い掛かる。だが、レフイヤは恐れない

いつだつて、情けない自分を守ってくれる人がいるから、強大な魔力を纏つたレフイヤに花のモンスターの触手と花が向かうが、レフイヤとの間に割り込み剣で弾いた人がいた。割り込んだのは己の信奉するアイズ、そのまま剣で次々と花を弾く

「ナイス！ アイズ、助かつた！ けがは!?」

「ううん、大丈夫。あの人は？」

「なんかよくわからぬいけれど、とても強いヒトよ」

「そう・・・レフイヤを守ればいいんだね?」

「そう！ 来たよ、大部分はあの人があの人が抑えてくれてるとは言えこいつら強いからね！」

「ん、分かつた」

みんなが戦つている間にレフイヤは詠唱を続ける。本当は皆の隣で戦いたい、けど自分にはこれしかないから。これしか自分の取柄がないから

隣に立てない事なんて百も承知、自分の取柄が魔法しかないのは自分が良くわかつてゐる。

（でも、それでも・・・！ 諦めたくないッ！）

「終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に、風<sup>うす</sup>を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の嚴冬——我が名はアールヴ】!!」「この詠唱・・・！」

「うん、これはレフィーヤのモノじやない。」

魔法の取得数は上限があり、ステイタスに確保される魔法スロットは三つ。つまりどれほど才能があろうとも三つまでしか魔法が使えないという事である。そしてレフィーヤが三つ目に取得した魔法が召喚魔法、効果は同胞<sup>エルフ</sup>の魔法のみ詠唱及び効果の完全把握二つ分の詠唱時間と精神力の消費これらを条件にあらゆる魔法を行使できる前代未聞の魔法

これらを踏まえ、神々が彼女に授けた二つ名は「千の妖精」、そして今詠唱しているのはエルフの王女にしてこのオラリオ1の魔法の使い手のリヴエリア・リヨス・アールヴの魔法

（私は諦めないいつか、みんなの隣で戦えるまで・・・・！）

【ワイン・ファインブルヴエルトル】!!!

その純白の奔流は、あらゆるもの凍結できる

「流石レフィーヤ！」

「さんざんやつてくれたわね、この薺花ア！」

そうして総攻撃を仕掛けたその時

「ツ!?（剣が・・・）

アイズの剣がバカリと折れてしまつたのだ。しかし、彼女の主神はかの天界きつてのトリックスター、ロキなのだから

「おーい！アーアイズたーん！これ使えー！！」

「・・・・流石、抜け目ない・・・」

ロキが投げた剣を受け取りティオナとティオネと一緒に仕掛ける

「「はあツ!!」」

砕けた氷がダイアモンドダストのようにキラキラと輝く

「ふいーお疲れーティオネー」

「お疲れ様、ティオナみんなも」

「うん、お疲れ」

「皆さん、ありがとうございましたお疲れ様です」

「そう皆で健闘を讃え合うが

「ちょっと待つて!? あの人は!？」

「「あ!?」」

そこには大量の花のモンスターの骸、もしくは残骸

「誰かおつたんか? ウチが来た時にはすでにああなつとつたけど」

「めっちゃ強い人がいたんだよ!! あの山全部片づけたんだよ! きっと

!」

「ほう? そないな強さもつとる奴なんて今じゃ「猛者」くらいしかおら  
へんけどなあ」

「「猛者」じやなかつたです、綺麗な女のひとでした」

「ははーなんなんやろうなあ、アイズたんは見たんか?」

「ううん、私が来た時には乱戦状態になつてたから良く見えなかつた」  
ふくむ、とロキは思案する

(これだけウチの子供たちが苦労してたのをあんだけ大量に倒せたと  
なるとまず間違いなく最低レベル6それ以下はありえへん、そんでこ  
の子らが見たことない強者となると昔居たヤツが戻つて来たか、オラ  
リオの外で生まれてこつちにやつて来たかいずれにしてもどこかで  
顔を合わせて起きたいんやけどなあ)

「誰か、その子の特徴を詳しく教えて貰えへんか?」

「あ、なら私が!」

「おん? レフィーヤたんが」

「はい、彼女は命の恩人なので分かるならお礼を言いたいなと思つて  
!」

「そうかそうか、なら教えて貰つてもええか?」

「はい! えつと・・・」

「千の妖精、お話中〜〜

「つてそんな感じの人です!」

そう嬉しそうに話し終わつたレフイーヤだが、肝心の口キからの反応がない

「・・・口キ様？」

「あ？あゝすまんな一応こいつかなあつて思つとる子はおるんやけど・・・」

「ホントですか!? 流石です！」

「あ、うん。そないキラキラして目で見ないでなんか傷つく

「そんなあ!?」

「まあ、ちょこつとだけ教えたるわ、他の子もええな？」

「うん！いいよー」

「お願ひします」

「うん」

「そんじやま、言うで多分やけどレフイーヤたんを助けたのは元【ヘラ・ファミリア】副団長【希望<sup>エルビス</sup>】の二つ名を持つとるヤマト・榛名・イスカンダル、レベル8の冒険者や」

## 四頁目

ヤマト side

ここは路地裏、誰も通りかからないような場所。そんな場所に一人歩き唐突に壁にどかりと音を立ててもたれかかった

「ふうー・・・・まさかあそこまで追加が入るとは・・・いくら俺が、俺の力が強すぎるからってあそこまでやることあることないでしょよ」「意外だな、我らが副団長殿があの程度の雑音に手を焼き、あまつさえ休憩を挟むほどとは。そこまであの雑音とのダンスは良かつたのか？」

そう声をかけて来たのは灰色の緩くウェーブのかかつたロングの髪を持ち翠と灰のオッドアイに女神さながらのプロポーションを黒いドレスで着飾った女性が話しかけて来た

「何言つてんのアルフィア、ちょっとばかり実力を測つてただけなのに、まさか七年も前線から離れて眼が衰えた？」

「それこそまさかだな、単純に疑問に思つてただけだあそこまで手間をかけずとも副団長殿の超短文詠唱魔法ショックカラノンであれば殲滅することは容易いであろうに、そうしない理由は単純に実力を測つてたとしか考えられん、しかも両方の実力を測るとは、意地が悪いなそこまでするほどのモノだったのか？」

そうニッコリと微笑むアルフィア、だが心外だ

「単純に今のロキトップの冒險者たち・ファミリアの実力がどんなものなのか間近で見たかつただけだよ、思つたより下で呆れたけど。よくあれで吠えたものだね」

「まつたくだ、これではザルドの奴が浮かばれんな」

ホントにね、そう呟きまた歩き始める

「それより、そつちは見たいものは見れた？」

「ああ、しつかりとな。だがあの紐女神は許せん、仮にも義母ははである私に挨拶に来ないと、な」

おうふ・・・そりやあヘステイア様も大変なことえ・・・・来てないとしている相手にどうやって挨拶するのよ・・・

「あははは・・・・ほどほどにね？」

「安心しろ、送還まではしない。それに見合う地獄は味わつてもらうが」

めっちゃ機嫌悪いじゃないですかやだー

「その、呑む?」

「ふむ、いやその、だな・・・・」

「ん? どうかした?」

「や? や、榛名はそこまで酒に強くなかったよ、な?」

「う、だけど。何かあつた?」

「い、いや! 大したことはない!」

確かにそこまでお酒に強くないし世間一般だと弱いに分類されるけど、人並みには呑むけどなあ・・・?

「まあいいや、それよりこれから鍛冶師に刀見せに行くけどついてくる?」

「愚問だな、ここでは榛名のスキルなしには好きに行動できないしな」

それもそつか、そう思いスキルを発動させる

「【回れ廻れ。散りゆくものよ。いなくなるならせめてヒトの役に立ちなさい】」

そう唱えるとそこにいた二人の姿が一瞬だけ塵に包まれたと思ったら姿が変わる榛名はハルメシアとして、ギルドの受付嬢としての姿へ。アルフィアは髪はストレートロングの茶髪に琥珀色の瞳、紺色の道着に黒の外套を羽織った姿となつた

「じゃ、行きましょうか!」

「ふふふ、だな」

スキル  
『岩塵偽装』  
アステロイドメック

・任意発動

・塵もしくは岩が自身もしくは対象を覆い隠せる量が周辺にあるこ

と

・効果対象三名まで

- ・上記の条件を満たし、詠唱式を唱えることで恩恵偽装及び存在偽装を施す

・詠唱式【回れ廻れ。散りゆくものよ。いなくなるならせめてヒトの役に立ちなさい】

・解呪式【外れて落ちよ。偽りの殻】

魔法  
《衝撃破砲》  
シヨツクカノン

・超短文詠唱

・最大15発まで同時発射可能

・精神力の注入量に応じて威力・射程向上

・詠唱式【シヨツクカノン】

少女、移動中

あの後は普通に大通りを通つて極東系のファミリアがあるところまでやつて來た。目的地は【天目一箇・ファミリア】、極東にて鍛冶を司る神を主神とする極東系零細ファミリアだが知る人ぞ知るファミリアだ、何故か？

「おーい、サナダさんいるー？」

「邪魔するぞ」

「少し待て・・・よし、何かあつたか？ハルさんにミオさん」

シバザクラの上に金槌と金ハサミがクロスしてエンブレムが描かれた暖簾をかき分けながら入ると何か作業をしていたこの男、天目一箇・ファミリア団長サナダ・志朗が出迎えてくれた。この男、レベル4の鍛冶師などが魔道具含め作れないものの解析できぬのものはほぼないという恐ろしい人だ、俺も初見の時はなんでこの人がこここの世界に居るんだって宇宙猫になつたもんだ

「えつとこの刀と羽ペンの整備と点検を頼みたくてね」

「なんだその程度の事か、お安い御用だ明日あたりに取りに来てくれ」「ん、了解。ところでさ」

「まだ何かあるのか？」

あの花のモンスターの魔石を取り出しつつ話す

「実は怪物祭の時に脱走したモンスターがいたんだよ」

「ほう、表の大通りがやけに騒がしかったのはそのせいいか」

「びっくりした？」

「まさか、可能性の一つとしては考えていたさ」

「相変わらずお前のその想像力は気持ち悪いな」

気持ちちは分かるけど相変わらず口悪いなあ・・・・・・

「はつはつは、そういうわれてもこれはなかなか直せないからな、許してくれ」

「それに救われた身だ、文句ではないただの所感だ」

「それは確かにそうだが、俺の薬はあくまできつかけを作つただけにすぎん、根治できたのは君らの努力のたまものだろう」

そう、あの「戦場の聖女」<sup>デアセイント</sup>ですら治せなかつたアルフイアの病魔を完治させたのがこの人なのだ、他にも俺が使つてる巫女服、千早に刀まで製作してゐる。逆に何が出来ないんだこの人

「んつんん、それでこの魔石が最後の方に出て来たモンスターの魔石なんだけど、どう思う?」

「ふむ・・・」

スッと持ち上げ様々な角度から見たり光に翳したりしてしばらくすると「色が鮮やかであること、それ以外は今のところ分からん」と言つた

「ダメかー」

「いくら俺とて、初見の素材を何の調べもせずに断言できん」

「ほう、断言はできんか」

何やら問い合わせるような声色でミオ——偽装してゐるアルフイアが言う

「ああそうだ、断言はできない。だが可能性なら示唆できるがどうする?」

「もちろん聞くよ」

「同じく、数々の素材を見て来た貴様の言葉だ信頼しよう」

そういうわれると照れると言いたげに一度頬をかいてから言い始めた

「こいつは人工物である可能性が高い、既存の魔石を加工もしくはモンスターそのものを加工して作られている可能性がある。そう考えると後ろにいる存在は――――」

「――モンスターを生み出しそれを使役して、いわゆる調教師ティマの可能性があると？」

「・・・そうだなさらに言えば敵は単独じやない、組織として動いていると見た方が良いだろう。これをもう少し詳しく調べたい預かっても良いか？」

「もちろん、というかあげるから好きにいじつて良いよ」

「助かる、じや優先的に前のモノを仕上げないとな」

依頼したのはこっちなんだから気を遣わなくとも良いのに、と思つたが野暮だと思つたので口には出さず苦笑いで答える

「そんじやここいらで失礼するよ、行こうミオお酒呑むんでしょ?」

「ツ!?あ、ああそう、だつたな。良し行くか!」

よしよし元気にな七（ガシツ

ん?  
「さあさあ!早く行くぞ!時間は有限だぞ!」

「ちょ!?ああサナダさんまた明日来るからよろしくうううううう!!??!!?」

「・・・・ふつ、あの様子じや明日は二日酔いだろう、ミオがヘタレなければそれ以上行くか・・・さて、私は私の仕事をしよう」

△月フ日

昨日は寝落ちしてしまったから昨日のぶんも今日書いてみた、やっぱりサナダさんは優秀過ぎてワロエナイ。なんで「そんなことだろうと思つてたから、大丈夫だ」つて言つてんのこわしかし、二日酔いまでは分かるんだけどなんか体全体が筋肉痛みたいになつてるしとうか腰と喉が痛い・・・予備のペンで書いてるけど字が震える、アル

フイアに聞いても「何もなかつた」ボットと化してゐるから使えないし……何があつたというのだ、なぞだ。とりあえず連絡して有給取つたから今日明日はお休み取れたから二度寝しようと思うぜ

△月+日

え？ アルフイアさん本気？ あ、ふーん（諦め）

（原作の場面に立ち会えるのは嬉しいけどそれ以上に）美味しいもの食べたいんだけどって言つてみたらなんかあの時食べれなかつた串焼きの店が18階層にあるらしいから行くらしい、いやほーたーのしみー

フイン side

ギルドの掲示板の前で依頼書を見ながら良い依頼がないか探してゐけどそうゆうのは大体朝方に無くなつちやうからなあ

「うーん、たまには普通の依頼をこなしてみようかと思つたけど中々良いのが無いね」

「そうですね、ああうちの愚妹の借金がああ・・・・・・」

そう言つて頭を抱えてるけど、僕はあははと乾いた笑いしか出てこないけど本人からしたら結構深刻だからこれ以上冒險者依頼を探すのはやめて出発しようかと思つたら

「あのーもしかして【ロキ・ファミリア】の人たちですか？」

声をかけて来たのはいつかの酒場のウエイトレスと紺色の道着の上に黒いローブを羽織つた女性だつた

「そーだけど、なんかよう？」

…女性だと分かつた瞬間にティオネの機嫌が急降下してゐるね、はははおなかいたい

「もしよかつたら依頼させてくれませんか？」

へえ？ 下手な依頼だつたら断らせてもらおうかな、ティオネが怖いし

「どうゆう事よ、それつて私達じゃないとダメなわけ？」

「いえ、特段そういうわけじやないんですが、18階層まで安全に私

達を送つて貰えそうなうえに近くに偶然近くにいて信頼できる冒険者がいるとなれば依頼しない手はないと思いますが？」

「ふくん、じゃあいくら出せるの？」

「そうですね、往復で二万ヴァリスはどうでしょう？悪くないと思いますが」

「うくん（チラツ）」

ははは、ここまでかな。でも、18階層に送るだけで2万は魅力的だここで少しでも稼いでおきたいからね

「うん、問題ないよ、18階層まで安全に君たちを送ることを約束しよ

う

そう言うと酒場の子はほつとしたような感じに黒いローブの人は若干面白くなさそうに・・・ティオネは不満そうにしてる

「じゃあお願ひします、私はハルメシア・エキドナウです」

「・・・ミオ・カンパーナだ」

「ははは、知つてると思うけど【ロキ・ファミリア】団長、【勇者】のフイン・ディムナだ」

「同じく【ロキ・ファミリア】の【怒蛇<sup>ヨルムンガンド</sup>】のティオネ・ヒリュテです、団長は私のだから！あんたらに渡さないから！」

「あ、あははは・・・大丈夫ですよ狙つてないので」

「同じく」

「ホント!? ホントのホントに!？」

「え、ええですからあんまり近寄らないで・・・」

「うん、これなら意外とすぐに仲良くなりそうかな。

「じゃ外に出てみんなを紹介しよう」

「はい、お願ひします」

「あー！待つて団長一緒に行こうよー！」

「慌てなくともいいのに」

「ところでなんか面白くなさげだね、やつぱり守られるの嫌？」  
「私以上の強者であればやぶさかでもないが、雑音を聞かせられるのは正直耐えられん」

「ま、まあまあ必要経費だとおもつて、ね？」

「チツ、帰つたらまた呑むぞ」

「良いけど、また俺記憶飛んじやうよ？」

「構わん、むしろ好都gん、ん”ん”なんでもない」

「そう、じゃあ今度はもう少し弱めのお酒にしてね、それが条件」

「いいだろう（強い上にクスリも使うか・・・）」

## 五頁目

リヴエリア side

「フインに依頼者を紹介された後、ダンジョンに潜っているが……」「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

叫びながら大双刃ウルガを振り回して!テイオナや余裕綽々と言つた表情で戦闘をこなすティオネ、アイズ、フイン。そして……

「ひいいいい!?あ!?今掠つたあ!?

・・・レフイーヤはもう少し落ち着け、仕方ない

「喉を突け!」

「はい!!」

言えばできるのだが……ふむ、今度の座学はそのあたりを意識してやつてみるか。教育とは難しいな

「後衛に配属されることが多い魔導師とは言えモンスターが近くに寄つてこないとは限らない、最低限自分の身は自分で守れるようにしておけ」

「は、はい……」

まつたく、何を絶望しているのか。いずれは、私の代わりになつてもらわねば困るというのに

「ふう、ハルメシア殿、ミオ殿疲れてはないか? 17階層までほぼノンストップで來ていたからな」

「大丈夫です。それにしても早いですねー」

「特に問題ない」

感心、といった感じのハルメシア殿とぶつきらぼうなミオ殿。だが、なんだ? この二人の若干の上から目線はまるで私達の方が強いと言いたげな声色は。

「そうか、だが二人とも凄いな。恩恵なしで第一級冒険者についてこられるとは」

若干の探りを入れてみる

「あーえっと、実を言うと元々身体能力には自信があつたんだけど、ど

ナルナ

「アーヴィング

「こも門前払いにしてねー」

「ほう、今の身体能力ならどここのファミリアでも引っ張りダコだとは思うが……ミオ殿も同じような理由か?」

「まあ……そうだな」

ふむ。含む事はあるようだが、それは今詮索することではないか。冒險者にステイタスの事を尋ねるのはタブーだしな。

「確かに、このメンバーならここまで来るの速かつただろうしね。二人に影響がないならこのまま行こうと思うが大丈夫かい?」

「大丈夫です」

「問題ない」

「よし、じゃあこのまま一直線に18階層まで行く!襲つてこない奴は無視しろ!」

「「「「了解!」」」

フインが指示を出したことで目に見えて速度が上がる、私とレフィーヤは後衛職なのと依頼人護衛の為後ろの上速度があまりないがそれでもレフィーヤにつまりレベル3の巡航速度についてこれるだけの身体能力がこの二人にはあることが今確定した、それも二人とも涼しい顔でこなしてるところを見る限り確実にレベル4はあるだろう、つまりどこのファミリアが潰れて今はあの酒場で働いているという事か

「冒険者、疾走中」

さて、そろそろ18階層との境界だな。運が悪ければ階層主ゴライアスと戦うことになるだろうがはてさてどうなることやら

「ありや? 階層主ゴライアスいないね、誰か倒しちゃつたぽい?」

「ンー、町の人総出で片づけたみたいだよ、交通が滞るからって

ふう、どうやらいないらしくな

「階層主ゴライアスとの戦闘が見られなくて残念か?二人とも」

「いえいえ、安全第一でお願いしてるのでむしろ良かつたです。(それには大体の実力は把握したし……)」

「？ どうか」

なにか言つた気がするが・・・まあ、良いだろう

「ところで二人ともここに来るのは初めてだつたか？」

「そう・・・ですね、だつたよね？」

「そうだな、（最近は）あまりダンジョンには来ないのでな」

「そうか、ではレフィーヤこの二人にこの町について説明してみろ」

「え!? わ、私がですか!?」

「なにを驚いている、私の授業を受けていればきちんと説明できるはずだぞ」

むしろ最初のほうにきつちりやつたはずなのだがな

「まさかできないとは言わないよな？」

「は、はい!! え、えっと18階層の街、通称リヴィラの街は18階層にある迷宮の樂園アンダーリゾートにある迷宮の樂園アンダーリゾートとは、この階層内であるならばモンスターが絶対に沸かないのです！ さらにこの階層は天井にびつしりと生えた水晶群によつて地上とは違うサイクルで朝・

昼・夜があるので！ ですよね?! リヴエリア様！」

ふむ

「よくできてるなだが――――――

「少し、足らないね。見て」

とフインが指を上に向ければ大断幕を指さしている。そして、その大断幕には『ようこそリヴィラの街へ 334』と書かれていた

「334・・・つてことはもしかして」

「そう、『334代目リヴィラの街』という事だ。つまり、過去に333回リヴィラの街は壊滅して再築してゐる」

「さ、333回つて・・・

「安全階層とは言え、何が起<sup>る</sup>のかわからぬ、それがダンジョンだ。これまで何度もこの町は異常事態イレギュラーが起きるたびにこの街を放棄しほとぼりが冷めたころにまた再建する。そんな冒險者の意地汚さとしぶとさを象徴するようなこの街を『世界で最も美しいローラグ・タウナラズ者達の街』と呼ぶ者もいる。が・・・どうも街の雰囲気がおかしい」

「そういえば、いつもより人が少ないような・・・」

そうだ、入口からここまで歩いてきたが冒険者<sup>ならず者</sup>の街だから当然騒がしいのだがいつもと比較すると人が少なく静かだ、つまり何かしらの異常事態が発生してるとみてまず間違い無いだろう

「おいおい殺しかあつたつて本当かよ！」

「ああ、ウソトキの宿がセノガ集まってる！」

そ、<sup>馬</sup>にて行つた。人紹の男から事情を察するが、

「どうしますか？ 団長」

「そうだねティオネ、街で宿をとる予定だからね無関心でも無関係でも居られないだろう。すぐに僕たちも行こうと言いたいのは山々なんだけど、依頼人の二人の事があるからね、どうしようか？二人はどうしたい」

そう、今は依頼人の二人がいる。この一人の意思次第ではすぐにで

「大丈夫です、また来ればいいだけの話ですから。今は事件の解決を優先して下さい」

「そうか、助かるよ。お礼に次回の案内の時は無料で引き受けるよ」「良いんですか？ありがとうございます」

ふふ、まつたくフインもお人よしだな。

「うん、それこれ

「それに、何ですか？」

# 「親指が疼くんだ」

「それは――」

／＼＼＼

件の『ヴィリーラの宿』とやらに来てみれば人がごつた返していた、レ  
フィーヤが跳ねてるがあいつの身長では届かんだろう、それよりも  
「すまないが、二人はここで待ってて貰いたい。あらぬ疑いがかから  
ぬよう、な。それに——」

ドゴンツ！

「……こうゆうことが起きるかな……」

何をやつてるんだティオネは、思わず頭を抱えてしまつたぞ  
「あはは・・・苦労されてるんですね・・・」

「まつたくだ、主神含め口クなのが少なくてな。かと言つてそういう  
た者が大抵実力者なのだから切り捨てようにも切り捨てられんしそ  
もそもファミリアの方針上そういう手段も取れなくてなしかも何  
が悪いってそういう奴らに限つて——」 クドクド

「あ、あの!」この事件が終わつたら私達と呑みませんか!?きっと疲れ  
てるんですよ!」

「それは、とても魅力的な誘いだな。よし、ではこ相伴にあずかるとし  
よう」

「頑張つて下さいね!」  
「ああ頑張るとも」

榛名 side

ふう行つた、か。それより

「ねえ、なんでそんなに機嫌悪いの?」

「別に、悪くはない」

いや、そんなに眉毛ハの字にして悪くないわけないでしょ

「・・・そんなに、リヴェリアと呑むのが嫌?」

「当たり前だろッ! あんな年増のババアなんぞとお前が一緒に呑ん

だらどうなるかは火を見るよりも明らかだろう！」

いや、俺も割と歳重ねてるけど、んんぐ・・・・あ!?

「そつか、正体がバレる!?」

「それもそうだが違う！」スパコーン！

「あいたあ!?」

いてて、それより

「行くよ、ミオ」

「そんなことだろうと思つたわ、どのレベルまでやる？」

「とりあえず、犠牲がなるべく少なくなるようにしたい。俺のは外す」

「私はどう動けば良い」

「できれば、串焼きを買つてきて！てのは置いといて、別の偽装を施すから剣ができる限り頑張つて。上限は3にしどぐ」

「分かつた」

裏路地に隠れてから。よし、この辺なら使つても問題ないだろう

【外れて落ちよ。偽りの殻】

俺らの姿が一時的に戻る、そして

【回れ廻れ。散りゆくものよ。いなくなるならせめてヒトの役に立ちなさい】

【アステロイドメック  
《岩塵偽装》】

「じゃ、後はよろしく！」

「任せよ、その代わり今夜は必ず付き合つてもらうぞ」

「げ、分かつたよ。ゆつくり飲ませてよ！」

「ああ任せよゆつくりやつてやる」

なんかぞわつ、つてした!?もしかしてそんなにヤバいやつ來てるのか・・・?來てたつけ?

## 六頁目

回想アイズ side

あの花のモンスターを倒した後、【ロキ・ファミリア】<sup>ホーム</sup>拠点の黄昏の館、その団長執務室にてファミリア内の主力たちが花のモンスターと戦闘していた時に現れた援軍（？）に対して会議をしていた。

「レベル8の元【ヘラ・ファミリア】……!? そんな、もうこの都市にはいらないハズじやあ……!？」

レフイーヤがそういうが、確かにそう習つたはず。ゼウス・ヘラ、両ファミリアは黒龍との敗戦の後、ロキ・フレイヤの策略により団員と主神のオラリオ追放になつたと

「せやなあ、けんどあいつだけは未だこの都市に未練があるのか知らんが、七年前の暗黒期の最後の方には顔を出してたからな……」

ロキは頭が痛そうな表情をしながら頭を抱える

「えつと、じゃあその人は一体どんなことをしたの？」

「ううん、これと言つて何かしたというのはあまり聞かないけど、一つだけハツキリしているのがある。」

「それはどんなんことですか？」

「今のロキ・ファミリアにおけるリヴエリアのような立ち位置だつたみたいだよ、ね？ リヴエリア」

そうフインが言うとリヴエリアは肩と長い筐耳を少し振るわせて、最初から閉じていた瞼を上げてこつちを見た

「……ああ、そうだな。まだ私が未熟だつたころ、よく相談に乗つて貰つてたし、一緒にダンジョンに潜つたりもしてた」

その時のリヴエリアは悲しいような、嬉しいような、複雑な顔をしていた

「半分は同じ王族妖精のハーフエルフとは言え、本人の気前も良く、極東の出身者独特的の空氣感で当時の私は随分と助けられたものだ」

「せやなく、あんときのリヴエリアたんは、フインやガレスともバツチにやり合つてたからなあ……毎日気が気じやなかつたわ」

「うつ……悪かつたな……」

「あははは・・・それを言われると、何も言い返せないなあ」

「まあ、あんときは儂らも若かつたからな。若気の至りじやよ

・・・何というか

「今からじやあ想像もつかない話ですねー」

「うん、想像つかない」

「だよねー！」

「まあそんな団長も素敵なんだろうけど。今度リヴェリアさんに聞いてみようかな」

「ブレないっスねー、ティオネさん」

「そうね、でも確かに当時の三人の様子を見たくはあるけど」

「見たいし知りたいけど、一人ともやめてあげなさい。人には知られたくないコトの一つや二つはあるものよ」

確かに、私もいくつかあるし・・・・・三人とも同じ気持ちなら、これ以上聞くのはやめておこう

「コホン、話を戻してだな。今のがあるのは彼女のお陰だ、今の副団長としての立ち回りや並列詠唱<sup>技 術</sup>は彼女から教えて貰つたものだ」

「今<sup>7</sup>のリヴェリアママがいるのはハルお姉ちゃんが居たお陰なんやろなあ」

「ニヤニヤするな口キ、鬱陶しいぞ」

「まあまあ落ち着けリヴェリア、そういうえばかりの〔希望〕<sup>エルビス</sup>は〔静寂〕の育て手だつたらしいな?」

「らしいね、彼女の戦闘スタイルと静寂のスタイルは酷似していたつて聞くし、何より〔静寂〕本人の発言で戦闘の根幹をなしたのは彼女だと言つたらしいしね」

フインもガレスもここまで相手を手放しで褒めるのは、結構珍しいかも

「じゃーき、その榛名さんってどんだけ強かつたの? レベル8つてことは今<sup>8</sup>の〔猛者〕<sup>オツタル</sup>より上で強かつたんでしょ?」

「あ、確かに。教育者として素晴らしいのは分かりましたが、それだけじゃかの〔ヘラ・ファミリア〕の副団長にはなれませんよね?」

確かにそうだ、現にリヴェリアは凄腕の魔導師でありながら後輩の

育成もしているからか、副団長という立場にいる

「うん、実力か…僕は今彼女とオツタルが戦つても、勝てるヴィジョンが思い浮かばないんだけど、どうかな?二人とも」

「儂も全くの同意見じやな、かの【暴喰】<sup>ザルド</sup>がほぼ抜けなかつたあの防御力を抜けるかどうかじやろう」

「技量も彼女はすさまじい、あの【静寂】<sup>アルフィア</sup>の師匠を務めてただけあつて並大抵の剣と魔法の腕前じやない。今のオツタルでもレベルが上がらないと厳しいだろう…むしろ、彼女単騎で【フレイヤ・ファミリア】が壊滅状態になる未来が見える」

そんな人物が副団長つて…当時の【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の団長はどれだけの…

「そして、何よりも大きな功績は、壊滅状態になつた両ファミリア撤退の為殿となり。黒龍に痛手を負わせ向こうを撤退させたというものだろう」

曰く、壊滅した両ファミリアを逃がすため、一人残り超長文詠唱魔法を使し黒龍を引かせたと言う。

「まあそんな感じなんやけどな、二つ名の命名するときがめつきおもうくてな?あのファミリア、どうやらマトモなのがハルちゃんくらいしかおらへんかつたやねん。そこで『ヘラの被害を少しでも抑えてくれる俺たちの希望』<sup>神々</sup>って意味でつけられたらしいで?」  
うわあ…

「なあ口キ、君含めて神つてのは、口クなのが居ないよね」「二つ名そのものはともかく過程が酷すぎる…」

「うつわ、ひつで。超凡人とか言われてる自分ほどじゃないけど」「ははは、口クなのが居ないのはその通りやな。みんなが想像するようないい神様つてのは、アストレアやヘステイア、ヘファイストスやタケミカヅチくらいなもんやで?」

余りカミサマに期待しないでおき、地上<sup>こつち</sup>じや全知無能やからな、と口キは締めくくつた

現在、【ロキ・ファミリア】拠点黄昏の館

ホーム

同団長執務室にて

「で、18階層で何があつたか教えて貰おうか？ フインにリヴエリア  
たん」

「ああ、もちろんだよ。こつちも相談しておきたかつたからね」

（）（）（）（）（）

（）（）（）（）（）

（）（）（）（）（）

（）（）

「ふうむ、なるほどなあ」

「アイズの事を『アリア』呼びした赤髪の女調教師ティマに食人花ヴィオラスと呼ばれた  
花のモンスター、そしてアイズが反応したとう謎の宝玉とその中にいた  
胎児、とな・・・」

「レベル6僕とリヴァリアが一人居て辛勝、相手の技量もレベルも高かつた」

そうだ、僕相手でも槍が破壊されるほどの技量、こちらの骨が折れるほど  
の硬さ、さらにエアリアルを発動した状態のアイズより上の脅

力、ハツキリ言つて異常の一言に尽きる

「しかし、食人花ヴィオラスが大量にいたにも関わらず人的被害は軽微、さらにつ  
の前の遠征で見かけた女型のモンスターと似たようなのが最後には  
現れたにも関わらず、だ」

「そして、聞けば凄腕の緑髪のエルフと赤褐色の髪の二人の女剣士が  
いたちゅうやん。推定レベルは3~4、フインこいつらに心当たりは  
あるんか？」

「あるわけないよ、僕らやフレイヤ以外のところでそこまで腕の良い

冒險者が居たなら、必ず噂くらいは聞くハズだし。何よりそこいらで売られている十把一絡げの長剣で、あの食人花の触手を切斷できる技量の保持者は今まで聞いたことが無い」

さらに言えばエルフで近接職ができるのはかなり少ない、それに腕が立つとなるとそれこそ【ディオニユソス・ファミリア】のファイルヴィス・シャリアくらいしか聞かない

「フインに依頼して来た二人組はどうなん？状況的に一番怪しいやろ？」

「それなんだけど、一人とも容姿が違つてたし――」

「――いや、分からんぞ」

おや？

「リヴエリアはある二人に対して何か心当たりがあるの？」

「ああ、というかフインよ忘れてないか？」

「うん？」

「全力ではなかつたとはいえ、レフイーヤの、ひいてはレベル3の身体能力について行けたのだぞ？」

「つ！」

そういえば、確かにあの二人は途中でバテてはいなかつたから…：

「じゃが、容姿が違つたのじやろう？そこはどう説明する？」

「そこは魔道具や別の服や鬘かづらという手もあるだろう」

「ふーん、それなんやけどな？リヴエリア」

「？なんだ」

「リヴエリアがその話するまでウチがその可能性見落としてたつて話する？」

「なつ！」

あの口キが！？

「気持ちはよう分かるで、ガレスにフイン」

「だけど口キが普通はその可能性見落とすことはないだろう？」

「ああ、普通はない」

「まさかとは思うが、口キはあの二人が敵を手引きしたと思つておるのか？」

「そ、それこそないだろう!? 片方ミオはともかくもう一人は豊穣の女主人で働いているのだぞ!」

「まあまあ落ち着けリヴェリアたん、あくまで可能性の話や」

(せやけど状況的に考えて怪しいのはその二人やねんけど、片方はミア母ちゃんの店ヒューマンで働いとるヒューマン、もう片方は無愛想なヒューマンどちらもエルフやない。エルフたちの気質を考えれば、余程の事がない限り自分の種族を隠したりはせん、最悪でも手引きしたくらいか。でも二人に何の利益がある?まずはそこからか……)

ロキはその二人組を怪しみ、思考を巡らす

(ふむ、その一人が怪しいのは変わらないのじゃが儂は違うと思うがのう・・・あの時確かに主力は集まつておつたし、そこで潰しておくのは敵からすれば利点ではあるが、あの赤髪の女ティマ調教師ティマはファイン達の事を知らなかつたと言つておつたしのう・・・なんかずれておる気がする)

以外と言つては何だが、ほぼ正解を導き出しているガレス

(問題はやはりなぜあの場面でと言つたところだろう、ロキ・ファミリアとは言え18階層に降りるだけなら他のファミリアでもよかつたはずだ、確實性という点ならば他と一線を画すであろうがわざわざ高額な報酬を用意する意味がわからん。その金で他のファミリアのパーティー3つ4つ雇つた方が良いだろうに……)

リヴェリアはなぜ自分たちにという点で頭を悩ませていた、だがこれはただ単純になんとなく知つている顔に依頼したかった榛名のせいである

(ロキには申し訳ないけど、出来ればミオの方だけでもウチのファミリアで確保しておきたい。そうすれば、少なくとも遠征の時には大きな力となるだろうし、なによりあの時武器をどこにも持つてなかつたのなら、それはあそこの武器屋から安物を確保したのだろう、そしてあの戦果だとするのなら。ウチの金銭的には大助かりなんだけどな……)

フィンはファミリアの経営費が火の車だという点を鑑みて、状況的に安剣で戦い大戦果を挙げたと推察する二人の内どちらかを引き入

れることが出来れば、少しでも節約できるかと考えていた

各々の考えがある中、控えめに扉をノックする音が響く。そして現れたアイズの発言により59階層への遠征が決定したのである。

## 七頁目

アイズ side

あの後、ロキにステイタスの更新をしてもらつてレベル6になつた。ヴダイオスをソロで討伐したかつたけど、途中少しリヴエリアに手伝つてもらつたけど、無事に倒せたから良かつた。

その帰り道に兎少年が倒れてるトコに出会つて、リヴエリアのアドバイス通りに癒<sup>膝枕をして</sup>してあげただけど・・・逃げられちゃつた・・・次の日、もう一度会つたつて偶然共闘したけど、前とは明らかに違う強さになつてた。なんとなく、嬉しい

その後、現れた黒いローブの人物の依頼で24階層に行くことになつたけど、まずは18階層にある『黄金の穴蔵亭』に向かい『協力者』と合流してから24階層に向かうとのことらしい  
(18階層にこんな場所があつたんだ・・・)

そこは街の隅の洞窟にできた酒場のようだつた、少し感心しつつ中に入ると何人かの冒険者らしき姿も見えるので、いわゆるここは穴場というものなんだろう

「ん?あれ『剣姫』じゃないか、久しぶり」

「ルルネさんだっけ?久しぶり」

中にいた客の一人は、リヴィラの街での騒動<sup>ゴタゴタ</sup>のある意味中心人物だつた【ヘルメス・ファミリア】の黒髪褐色の犬<sup>シアンスローブ</sup>人の女団員ルルネ・ルーアンさん

「いやーこの前は世話になつたな、お礼に何か一つ奢らせてよ」

「うん、ありがと(えつと確か、右から一つ目の席に座つて・・・)

黒いローブの人から教えられた合図の通りにやる、次は――

「注文は?」

『そう聞かれたらこう答えるんだ』

『ジャガ丸くん抹茶クリーム味』

「いで!?」

「!？」

急にルルネさんが頭から地面に向かって仰向きに結構大きな音を立てて倒れた・・・びっくりして肩が少しほねた

「あ、あんたが援軍!？」

その時、一斉に中の客が立ちあがつたつてことは・・・もしかして、この中にいる人全員『協力者』!?

「ルルネ、いつまでみつともない姿をさらしているのですか、とつとど直りなさい」

「あ、ハイ！」

水色の短髪にメガネをかけた知的な女性、【ヘルメス・ファミリア】団長【万能者】ペルセウスアスフィイ・アル・アンドロメダ、レベル4の冒険者にして発展アビリティ《神秘》を発現させて世界有数の魔道具マジックアイテムの作成者。そんな人がいるつてことは――

「ええ、お察しの通りここに居る人物は皆ヘルメス・ファミリアです。さて、剣姫貴方一人で現れたという事はもう一人の事は、貴方と関係がない、ないし薄い人物なのでしょうね」

「まだ、援軍が来るの?」

「かの黒いローブの人物の話では援軍はもう一人来る手筈なのです  
が、一体いつになつたら来るのでしよう・・・?」

まあ良いです、もう少ししたら来るでしよう。とアスフィイさんが言うので皆また思い思いの時間を過ごしていた、私はルルネさんと飲み物を飲みながらお話していくで過ごすこと10分ほど、灰色のローブをかぶった人が私の右隣りに座った

「らつしやい、注文は?」

店主らしい、ドワーフの男性が声をかけると

『ジャガ丸くん宇治金時味』

と件の人物は答え、隣のルルネさんを見ると頷いていたので援軍で間違いないのだろう

「貴方が件の援軍ですね、出来れば名前と顔を確認したいのですが・・・よろしいでしようか?」

「・・・・・」

その人は一度大きくため息を吐いた後、席を立ち後ろにいるアス  
フィさんと向かい合いフードを取つた

「私は——俺の名はヤマト・榛名・イスカンダルだ、二つ名は「希望」  
よろしくな? 「万能者」、それとも久しぶりの方が良かつたか?」  
「なつ! あ、あなたが何故、ここに!?」

あ、あの人——

「何故つてそんなんヘルズに依頼されたからに決まつてるだろ?  
「だからと言つて都市外にいればそんなすぐには——!?」

? 何かに気づいたようだけども···

アスフィはわなわなと震え、榛名は面白そうにニヤニヤしつつ答える

「そう、私は少なくとも6年前にはオラリオに戻つて来てたよ  
「馬鹿な、あり得ない。あのヘルメスの情報網から逃れれるなど——」

なんか割と酷いのを聞いた気がするけど···

「まあまあ、今はそんな問答をしてる暇はないだろ?」

「貴女はツ——! はあ、もういいです。ええ確かに、今すべきことではありますね」

コイツ後でぜつて一問い合わせめる、つて顔してるけど大丈夫なのかな···榛名さんはケラケラ笑つてるけど···アスフィさんなんだ  
カリヴァリアみたい、大丈夫かな

「それでは、人員も集まつたことですし行きますか」

（～～～～～～～～～～）

（～～～～～～～～）

（～～～～）

（～～）

あの後早速移動し始めて現在24階層へ行くための階段付近な  
だけど···

「・・・」

き、気まずい……リヴェリアの師匠（？）みたいな人らしいけど、なに話せばいいのか……

「あ、あの……」

「ん? どうしたの?」

取り敢えず、なんでもいいから話してみる。リヴェリアから教えて貰つたことの一つ

「リヴェリアの師匠って聞いたけど、本当?」

「え? あー……まあ、ね」

顔を明後日の方に向に逸らしつつ言いよどむ、もしかしてリヴェリアと合わないのは何かすごい事情が……?

(なんか顔が近い……! 何この娘、距離感バクつてない?<sup>リヴェリア</sup>親しいころに互いに着けた愛称、榛名は『ハルねえさん』と呼ばれてたは育て方間違えたんじゃ……)

「コホン、まあどちらかと言えば、リヴェリアの事は弟子というより妹みたいに思つてたよ。割と歳も近くてエルフ基準割と強力な魔法が使えたから並列詠唱やら保留詠唱やらいろいろ教えてたよ」

その時の彼女の表情は、自慢げでとても楽しそうで、でもどこか悲しそうで

「……会いに行かないの?」

「行きたいけどね、なんと言うか、その、気まずくて。あの子も今じや立派な副団長だ、今更過去の人間が会いに行つて、困惑させて。その後の活動に支障が出たら……と思うと、他の人に申し訳が無いし、何よりもまだ自分自身の決心がついてないから……」

この人は、大事にしている人の大事なモノを傷つけたくないからそうして、けど――

「それでも――」

「?」

「それでも、私は会いに行つて欲しい。親しい人の……家族が生きていたら、会えたら、きっと喜ぶ」

春名さんは目を大きく見開いていて息をのんだ

「どうして、そう思つの……？」

だつて、私もお母さんとお父さんに会えたらきつと――

私が そ う だ か ら

きつと喜びを隠せない、そう伝えると彼女は一度大きく息を吐いて「そつか・・・考えて、みる」

そう語つた

}{ }{ }{ }{ }

{ } { }

二  
三

「思ひもなるほどなるほど」と  
の後量産第一回の一節

あの後食糧庫に向かつて進軍していたところ、モンスターの大行進に出会いアスフイさんが「我々の実力を見ていて欲しい」とのことだつたので榛名さんと一緒に見ているのだが、連携がすさまじいアスフイさんの指示は的確で素早い、他のメンバーもそれを信頼しすぐさま実行できる胆力と実力がある。

—すこい・・・

思れず 声か出でしまつた

「う、う、す、二、ふ、つ、二。」アスファイドの言葉はまるでアライ

た

そう言われると照れきれて、様子はどんどうが、「う、う、う」と三度言つて、吉三不安が戻る、かぶこ

あの時みたいな優しい雰囲気じゃなくてどこか棘のある空気を纏  
い、講評をしていく

「まず、全体的に決定打が無い。魔法や魔道具があるけどいづれも消耗品、無くなつたら終わり、これだと短期決戦か格下にしか通じない。後は単純にレベル不足、誰かあと一人レベル4になつていたりアスファイガ5にでもなつてれば話は別だけど……」

これが、かつての最強の片割れの副団長としての評価なのだろう。「割ときつく言いますね、今回の依頼はそこまでのモノなのでですか?」「ギルドが俺に声かけた時点で察しろよ、万能者。<sup>アスファイ</sup>絶対何かヤバいことが起きるつて」

### レベル不足

その言葉を聞いた時、思わず目をそらしてしまった。未だ猛者オツタルしか到達できていないレベル7、過去の二大ファミリアはレベル5・6はゴロゴロいて7以上も普通にいたというバケモノ。

彼らの後を繼いだと言われている、今のロキ・フレイヤ両ファミリアを合わせても、かつての片割れの一つにも届かない、質と量両方を兼ね備えたまさに最強。

未だ、私達は彼らに並べてない

「…・どうすれば」

「うん?」

「どうすれば、あんたらみたいにレベルを上げられる」

そう聞くのはヘルメス・ファミリアの大槌を持つた小人族バルウムの男・：男性?に對して榛名さんは淡々と答える

「簡単だよ、冒險をすれば良い。自分自身を命の危機にさらし、そして生きて帰ること、これがレベルアップのコツだ、よく勘違いいちがちなのが強敵を倒すことをレベルアップの機会と認識していることだな」「ツ!違うのかよ!」

「違わないとは言わない、強敵と相対し、そして打ち倒して生きて主神の元まで帰ること、ここまでが冒險だぜ?強敵を倒してハイ終わりじゃない、生きていなければ恩恵の更新も出来ないからレベルアップできないからね」

思わず、なるほど、とつぶやいていた。他の人もしきりに頷いていたり口を開けていたりしているし

「なるほど…では、今の私達にふさわしい試練とはn「その話は後でね?今はこの依頼に集中して、終わったら各自に即した内容を伝えられるから」…分かりました、総員この依頼をとつとと終わらせますよ!そしてコイツの度肝を抜いてやるのです!」

「「「「おうツ！」」」

「ちよつ!? 何それ!?

「ん、頑張る」

「剣姫!？」

今の私だと昔より成長していない気がする、かつて様々な人を育て上げたこの人なら解決してくれるかも・・・

依頼を受けた神々の眷属は地下深くへと赴く、迷宮ダンジョンが生み出した悪意、その結晶を眷属が打ち碎くのかそれとも結晶に喰われるのか、正史と違つてここには今の英雄が居る、これが吉と出るのか凶と出るのかそれは神すら知らぬ、運命と言われるものにしか知らない